



Title	グレゴリー・ケズナジャットの小説における“同じ”と“違い”の往還について
Author(s)	木原, 善彦
Citation	大阪大学人文学林シンポジウム グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読む. 2026, p. 29-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105167
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

グレゴリー・ケズナジャットの小説における“同じ”と“違い”の往還について

木原善彦（人文学研究科言語文化学専攻表象文化論講座）

グレゴリー・ケズナジャットの小説については、鴻巣友季子『小説、この小さきもの』で「生まれつき翻訳」に分類されている（209）のをはじめとして、英語と日本語の間にあるその「微かな空隙」、微妙な「揺らぎ」（奥野 13）のようなものがしばしば魅力的とされる。本稿ではその揺らぎがぼんやりとでなく、スイッチのようにパチリと切り替わる、分かりやすい瞬間に注目しながら作品を読んでみたい。

具体的には、言葉や文化がぶつかり合う場面で「違うけど同じ」「同じだけど違う」といった形で、いくつかの要素が変奏されている様を追う。

まず、ケズナジャットの『開墾地』から見ていこう。この小説は、「違うけど同じ」という要素で始まって、「同じだけど違う」という要素で締めくくられていることを以下に示す。

小説の冒頭で読者の耳に入ってくるのは、キリギリスの鳴き声である（4）。いや、正確にはそうではない。その虫はキリギリスの仲間だが、小説の舞台はアメリカのサウスカロライナなので、ジジジあるいはギギギと3音節で鳴く *katydid* である。*katydid* という名前自体、小説中にも書かれているように、オノマトペ的に、*ka-ty-did* と聞こえる鳴き声に由来している。無論、日本のキリギリスは「チョン・ギース」と鳴くので、その点は決定的に違うのだが、主人公はその声を聞いてキリギリスという日本語の単語を先に思い浮かべる。

ここで起きているのは、単に日本生活の長い主人公の頭には日本語が先に思い浮かんだということではなく、おそらくもっと深く、複雑なことである。まず、主人公ラッセルは日本文化をしっかりと学んでいる人物なので英語の *katydid* が日本語のキリギリスにおおよそ対応していることを知っている。しかもただのバッタではなく、キリギリスという単語を知っているからには、それが「チョン・ギース」という特徴的な鳴き方をすることも知っているはずである。それならなぜ、*katydid* の鳴き声を聞いて先にキリギリスという単語を思い浮かべるのか。

考えられるのはこうだ。ジジジという3音節の鳴き声は普通、英語話者の耳には *katydid* と聞こえるわけだが、ここでラッセルの耳には日本語の音で「キリ・ギリ・ス」あるいは「キリ・キリ・キリ」という3拍子に聞こえている。つまり主人公（の耳、あるいは彼の脳）にとって *katydid* は「キリギリス」と鳴いているのである。

重要なのは、アメリカの *katydid* は日本のキリギリスとは違う昆虫なのに、*katydid* のジジジという鳴き声が「キリギリス」という日本語の単語に化けているという点だ。これが先に述べた「違うのに同じ」という要素である。

『開墾地』の中には、日本人の目から見て面白いものがもう一つ登場する。それは植物の葛（くず）である。葛はどこにでも生えている蔓性の雑草で、初秋に赤紫色の花を咲かせる。とはいえ、日本人の多くはおそらく雑草としての葛よりも、解熱剤として服用する

葛根湯の原料として、あるいは葛湯や葛餅に使う原料といった形でその名前を知っている。いずれにしてもとても身近で、歴史的になじみのある植物だ。

ところが『開墾地』に出てくる葛は、そうしたイメージとは大きく異なる。英和辞典で KUDZU を引いたことがある人ならよく知るように、この植物はかつて家畜の飼料用・土壌浸食防止用としてアメリカ南部に持ち込まれた後、近年では、たちの悪い外来植物として厄介物扱いされている。そして小説の最後の場面では、このカッヅー（32）が邪魔ものとして焼かれ、その灰と煙が小説を締めくくる（90）。

こうして植物学的には同じ植物でありながら、置かれた土地によって葛とカッヅーの扱われ方や振る舞いがまったく異なっている。これが先に述べた「同じなのに違う」ということの意味である。

なおここで言及した要素（ギリギリス、katydid、葛、kudzu）がいずれも K の音を伴っていることにも簡単に触れておこう。ケズナジャットはエッセイ集『言葉のトランジット』で、「（日本語を）音読するのと同様に、オーディオブックや朗読の録音も日常的に聴いている」（130）と述べているので、その影響がこうした部分に現れているのかもしれない（以下で注目する要素〔カワムラさん、ユカ〕にも K 音が入っているが、それはあくまでも偶然である）。

次にケズナジャットの現時点での最新作『トラジェクトリー』について考えよう。こちらでは、やはり『開墾地』と似ていなくもないパターンで、「全然違う人たちが違うものを見ていたと思ったら、実はそれは同じものだった」という構造になっている、ということに注目したい。

この小説で最も印象的なエピソードの流れを追うと次のようになる。英会話学校に通うカワムラさんという定年退職したらしき男性がいて、彼は他の学習者と一緒に行く普通のディスカッションには消極的だが、マンツーマンレッスンではアポロ 11 号の通信記録（8 日分）を脚本のように読み上げるという独特な作業を熱心に行っている。そして彼が毎回提出する短いエッセイは望遠鏡のことや宇宙のことを扱っていて、非常に詩的で印象的である。このあたりの構成とか、口調・文体の落差は本当に見事だ。ところがあるときからカワムラさんは英会話学校に来なくなってしまう。小説の最後のセクション（102 以下）は場面が約 10 年後に飛び、主人公のブランドンは手元に残されたカワムラさんのエッセイを読み返し、小説の最後は、「一言ずつ、長い間聞こえなかった声がよみがえってきた」と閉じられる。

このようにしてこの小説には、カワムラさんが急にいなくなるという印象的な流れがあるわけだが、実はもう一人、途中でこの小説の中からいなくなる人物がいる。それはユカという名前の受付スタッフの女性である。ブランドンは 10 年後の場面で、かつての同僚や教え子のことを次々に思い出すが、ユカの名前だけはなぜか出てこない。ユカとカワムラさんはまったく違うタイプの 2 人だが、ある意味、同じようにして作中から姿を消してい

ると言えるだろう。では改めて作品を振り返ったとき、その2人を結ぶものが何かあるだろうか？ 2人に共通しているものは何なのか？

ブランドンは元々、日本の民家の奥にある生活(39)というか「しじま」「濃厚な虚無」(54)にやや危ない興味を抱いているが、結局、彼が誰かの家に忍び込んだりすることは起こらない。実際に彼が成り行きで訪れる日本人の部屋は、ユカの部屋である。ユカは英語が堪能でコミュニケーション能力に長けていて、「簡単に文化と言葉の間を行き来する」(14)女性なので、カワムラさんとは対照的だ。しかし本人はかつて「(私は)グローバルじゃなくて結構」(57)とも言っていた。そして彼女の部屋自体には結局、ブランドンが特に目に留めるようなものはないのだが、朝になってブランドンはユカの部屋から窓の外を見る。そして「その空を見てブランドンはふと、カワムラさんのことを思い出した」(95)と書かれている。

つまり結局、ブランドンが日本人の生活の奥にあると幻想を抱いていた場所、つまり日本人の部屋そのものには特にローカルなものも秘密めいたものもなく、グローバルな何かがあるわけでもなく、ただ部屋のさらに奥、窓の向こうに空が広がるだけだった、そしてその空というのは、カワムラさんが憧れていた宇宙や、カワムラさんが「海外のミステイク」と呼んでいたものと同じものだったということになる。「海外のミステイク」というのは、噛み砕いて言えば、「自分の文化の外にあるものにかつてまわりついていた神秘的オーラみたいなもの」ということだろう。したがって、カワムラさんとブランドンは全然違うものに憧れや興味を抱いているのかと思いきや、実は二人の視線の先には同じ神秘的なオーラが存在していたということになる。

昨今、人工知能で英和・和英双方向の翻訳精度が画期的なレベルに達しつつあるが、一つの言語の外に出る面白さを味わえるのは外国語を学習する人間当人しかいない。そしてわれわれを自分の文化の外に引きつけるものは常に謎めいた異文化のオーラだろう。ケズナジャットの小説はそうした異文化のオーラを改めて感じさせてくれる。

引用文献

奥野克巳 「英会話学校 魂の奇跡」読売新聞書評（2025年8月3日朝刊13頁）

ケズナジャット、グレゴリー 『開墾地』（講談社、2023）

ケズナジャット、グレゴリー 『言葉のトランジット』（講談社、2025）

ケズナジャット、グレゴリー 『トラジェクトリー』（文藝春秋、2025）

鴻巣友季子 『小説、この小さきもの』（朝日新聞出版、2025）